

さんこう昔話文庫

第2話 和与石

(八面山縁起より)

大宝元年（701年）八幡大菩薩が衛生済度のため如意宝珠（一切の願いごとがかなえられる）を英彦山権現より賜ろうと思ひ、宇佐の小倉山から英彦山に行った。そこへ法蓮（八面山開基の僧にあって、当時英彦山で修行）が来て「私はまだ宝珠を見たことがない」といふ。権現が珠を見せようと法蓮の前に置くと、八幡に奉仕する翁が出て来て珠は私に渡してほしいといひ、欺いて持って逃げたので法蓮は大変怒り「諫山郷南の高山（箭山）まで追いかけて大菩薩を大声で問責するとその声が伊予（四国）石鎚山まで聞こえた。大菩薩は金色の鷹となり金色の犬（翁）を召しつれて飛んで帰って来た。そして八面山の大きな岩の上で話し合った。「私は八幡大菩薩である。私に宝珠を渡すなら、宇佐に乗○のときは、神宮寺別当に任せよう」といふので法蓮は和与（和解）した。そして八幡は永く宝珠を得ることができ、法蓮も神宮寺の別当となった。この話しあひをした大きな岩を和与石と呼んでいる。



第2話 和与石

(三光村誌より)

八面山の和与石のことを、地元では和号(わごう)石・評定(ひょうじょう)石と呼んでいる。この石には、八幡大菩薩と法蓮の伝承があるが、次のような話もある。

大昔、箭山の神とヌーバル（十文字原）の神がいて、二人は仲が良かった。ある日ヌーバルの神が箭山に来た。二人は大石に腰かけて、今まで共同所有していた石と湯について、どちらがどれを取るかということで評定した。ヌーバルの神は、地元の箭山の神に「あなたから先に」といふので箭山の神は石を取



った。ヌーバルの神は、石が欲しかったのであるが、仕方なく湯を取った。こんなことがあってから、ますます二人は和合の渡を深めていった。その時腰かけた石がこの和与石であるという。現在、八面山に巨石が多く、別府に湯が出るのは、二人の神の評定が基になっている、という。